

あゆみ通信

VOL. 167

あゆみの会(真宗大谷派大阪教区第2組同朋の会推進員連絡協議会) 会長 細川 克彦 広報 本持 喜康

親鸞のことば

縁のめぐりあわせのおそろしさ

さるべき業縁のもよおせば いかなるふるまいもすべし (歎異抄)

善いことをするのは、その人の性根が善いからではない。悪いことをするのは、悪人だからではない。すべてがめぐりあわせで、善いことをしたり悪いことをしたりするのだ、と親鸞は言います。

私たちは人の不正や失敗を批判しがちです。その時、批判の多くは、自分はそんなことはしないという立場でなされます。しかし、めぐりあわせがあれば、誰しもが同じようなことをしてしまうのが私たちです。そのような事実を教えられる時、そこに起こるのは、批判ではなく赦しでは無いでしょうか。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

アレン・ネルソンを偲ぶ



3月になると、彼を思い出す。特におこなお続く(2/15現在)、理不尽な理由によるロシアのウクライナ侵攻を。

1965年、貧困から海兵隊入り、ベトナム戦争に従軍した彼は、幾多の戦闘の中で、人間性を取り戻し、負傷して帰国。以後、20年近くPTSD(心的外傷後ストレス障害)に苦しむ。熱心な医師による治療で克服し、平和運動に参加。沖縄の現状を知り、以後10年間来日して平和活動を展開。たまたま通訳を頼まれた平塚幸次郎先生は、自分の阿高師時代の恩師で、彼の話しに感激し、以後、全国講演に通訳として帯同。関西帯同時は自宅を提供。難波別院をはじめ、全国の小・中学校や高校、大学、専門学校等。そして人権平和団体や企業、市民団体、宗教団体や寺院で、講演11万回を超えた。しかし、彼はアメリカがベトナムで撒いた枯葉剤の要因の「多発性骨髄腫」で2009年に61歳でお浄土へ。日本の友人の一人である佐野明弘住職の真宗大谷派光闡坊(石川県加賀市)に、釈阿蓮として眠る。

聞法ということ

和田 稷先生



蓮如様の「心得たと思うは、心得ぬなり」と言うお言葉があります。「わしは分かった」という「わし」と言うものが付く限り、何も分かっていない。真宗と言うものを自分のモノサシに合わせて理解しただけや。

どうでしょうなあ。真宗、真宗と言っておるけれど実は自分の持っているモノサシを言うておるのです。そしてそのモノサシに合うと、「今日はええ話しやった」モノサシに合わないと「何もありがたくなかった」そうすると、始めから「聞く」と言うことが無いんですね。自分で今日まで作り上げた「自分のモノサシ」を、しっかり握りしめてそれが壊れたら大変やと。するといつの間にか、親鸞聖人のお言葉よりも自分のモノサシの方が大事になってくるのです。それでは具合が悪いから、親鸞聖人が私のモノサシを守って下さると。守り神にしてしまう。(法話から抜粋)

(和田稷先生紹介【1916-2006、元石川県立大聖寺高校校長等歴任、元真宗教学研究所属託、真宗大谷派浄泉寺前住職】)

第38回第2組同朋大会

日時 3月11日(土) 14:00 ~ (受付 13:30)

会場 難波別院同朋会館講堂

内容 お勤めと法話

講題 柔らかな心

講師 釈 徹宗先生

(相愛大学学長、浄土真宗本願寺派如来寺)

参加費 1000円

(記念品贈呈)



聞法会日程決まる

第2組仏事の柱の一つである「聞法会」の今年の日程が、1/18(水)教化委員会(光照寺)及び1/24(火)組会(宗恩寺)で決まりました。

各寺院では、コロナ対策を行いながら進めます。皆様のご参加をお待ちしています。

○第1回

日時 4月27日(木) 午後2時

会場 紹隆寺(天王寺区堀越町)

講師 大橋 恵真先生

参加費 500円

○第2回共に学ぶ正信偈

日時 5月23日(火) 午後2時

会場 専行寺(天王寺区堂ヶ芝)

講師 新田修巳先生

平野区 正業寺)

参加費 500円

○第3回

日時 6月16日(金) 午後2時

会場 宗恩寺(天王寺区四天王寺)

講師 宮部 渡先生

参加費 500円

○第4回共に学ぶ正信偈

日時 7月22日(土) 午後2時

会場 法山寺(阿倍野区天王寺町)

講師 新田修巳先生

参加費 500円

○第5回

日時 8月26日(土)午後2時

会場 光照寺(天王寺区上汐)

講師 廣瀬 俊先生

参加費 500円

○第6回共に学ぶ正信偈

日時 9月27日(水) 午後2時

会場 憶想寺(浪速区恵美須町西)

講師 新田 修巳先生

参加費 500円

宗祖親鸞聖人御生誕850年・立教開宗800年慶讃法要

50年サイクルでのご法要です。

第1期法要は、2023年3月25日(土)~4月8日(土)

第2期法要は、2023年4月15日(土)~4月29日(土)

真宗本廟で厳修されます。

紙上法話

大無量寿経の仏道⑭
延塚知道先生

東京で、僕は隔週に話に行ってる。そこに、お医者さんが来ている。立派なお医者さんでそこで僕が「医者



は「治る病気が治さん」て言ったら「その通りです」と言う。その人は「治らないものは、治せん」と言う。人間は生きていく元気がある間しか、生きられないんです。それを手助けするのが医者であって、それ以上は出来ませんと。

だから死ななかつた人は、一人もいません。病人になり老人になり死ぬという制約の中にあっても、それに少しもとらわれないようになる、そういう自由さ、仏さまの中に、それを見たんです。

制約にとらわれない

私たちが世間の常識で自由になろうとすると、まず第一に必要なのは金や。金があったらどこでも行ける。その次は権力。権力があれば、人を自由にできる。世間の頭で考えて自由になろうとしたら、王さまになっていくことなんや。金をもって権力をもって、王さまになっていく。

ところが国王は、何も持っていないまる裸の世自在王仏に会って、自由な人に会ってびっくりしたんや。それ世間のものを、全部捨てたんや。何も持ってないのに、自由である。老病死と言う制約の中にあって、少しもとらわれない自由になっている。

そういう人を見て、初めてこれは世間のものでは絶対に追いつかんと言うことが分って、国王の位を捨てて法蔵菩薩と言う沙門になられた。

だからこれは、阿難がお釈迦さまに出会った。その時、阿難はお釈迦さまを通して、そういう自体満足で自由な阿

弥陀の悟りを見た。お釈迦さまは阿難に、「お前の中に法蔵菩薩が生まれたんやぞ」と言われたんでしょ。そうやって法蔵菩薩と世自在王仏との出会いから、この『大無量寿経』が説かれて行きます。

こういう「無上正心道の意をおこした」と言うこの上ない、悟りの道に向かう心。これはお金が欲しいとか地位が欲しいとか言う娑婆の心じゃない。そうじゃなくて国王の位を捨てて、世自在王如来になる道、それを欲しいと言って、無上正心道をおこされた。

国王は世自在王如来の足に、接足作礼をします。自分の額を足につけて合掌する。インドの最も素晴らしい合掌の作法や。あなたを仏さまと仰いで、足に額をつける。そして歌をうたう。光顔巍巍という、あの『嘆佛偈』(真宗聖典11項)を歌って仏さまを誉めるんや。

自身に目覚めよ

その『嘆佛偈』が終わって、こう言います。「ややしかり世尊、われ無上正覚の心を起こせり。願わくは、仏、わがために広く教法をのべたまえ」世自在王如来に法蔵菩薩が、私のために世自在王如来になっていく方法を教えてくださいと問うわけです。

「われまさに修行して、仏国を撰取し、清浄に無量の妙土を莊嚴すべし」と。そういう浄土と言う世界を、自分は一生懸命修行して獲得したいと。

仏さまと言うのは、自分の悟りの世界と一緒に生きてる人として、如来の子としてみんなを見ます。僕らは他の人を見ると都合がいい人とか悪い人とか、友達とか友達でないとかしか見ません。だけど仏さまは、みんなを尊敬する。

そういうことが出来ると言うことは、自分だけが悟ったと言うことじゃなくて、そう言う悟りの大きな世界中でみんな一緒に生きている。そういう浄土を生きている。だから法蔵菩薩は、世自在王如来が立っておられる浄土に私も

立ちたいから、教えてください。

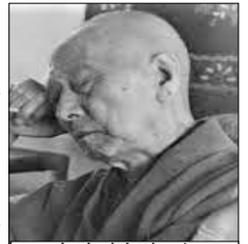
そしたら世自在王仏が法蔵菩薩に言われた。「修行せんところのごとく、莊嚴の仏土、汝自ら當りに知るべし」と。

「汝自当知」これは有名な言葉で、暁烏(敏)先生がよくお書きになった。

この言葉の昔からの解釈は「法蔵菩薩は、もう世自在王仏が教えなくても、阿弥陀の浄土を知っているはずだから、自分で阿弥陀の浄土を建立しなさい」となっていたのです。

身近な諸仏

ところが、暁烏敏先生は違う。「汝自ら當りに知るべし」とは、『おまえ自身に目覚めよと言う言葉や』と。自分が何者であるかと言うことに目覚めなさい、そこに浄土があるんですよと。



暁烏敏先生

自分とは何者であるか、それは、いつでも自分を立てて反省する目を持たずに、いつでも自分を中心にして問題が起こる。そんな自分に目覚めて、頭が下がることによって自由な主体になっていく。

自分に目覚めると言うのは、真宗の核心。浄土教で言うと、自分とは何ものであるかと言うことに目覚めるのを、機の深信。そういう自分自身への目覚めが起こったところに、浄土と言う世界が感得される。だから自分とは何ものであるかと言うことに目覚めなさい、と言われたのが暁烏敏先生です。暁烏先生は、やっぱりさすがだと思う。

ところが、法蔵菩薩は「この義、弘深にして、わが境界にあらず」「非我境界」浄土と言う世界は私の境界ではありません。それはちょっと無理ですと答える。世界中の人が救われて行くような、そんな悟りは私の責任ではとてもわかることではありませんと。(つづく)